

三大テノール歌手を呼んできて、ドジャースの球場でやりましたよね。音が悪いとかいいとかいう問題はあれども、単に競技だけに使うのではなくて、スタジアムというものをいろんなものに使っていく。横浜の施設も、いろいろ考えて、多目的に使うということは考えています。

③ 交通アクセスはフレキシブルに考える

森野 広域開催自体は、内外から高い評価を受けると思うのですが、気になるのは、先ほども出ていましたが、アクセスですよね。宮本 そうですね。後は、結局アクセスの問題でしょうね。アトラクタでも、いろいろ問題になって、報道されていましたが、開催エリアが広くなればなるほど、選手とか観客が混乱しない状態にすることが重要になってくる。

僕は、アクセスをどう整備して開発するかという点は、やっぱり関東一円と一緒に考えて計画していくべきだと思うんですね。それさえクリアすれば、素晴らしいプランだと思います。

森野 場合によつたら、選手宿舎みたいなものは分散しても構わないわけですね。カヌーの選手が横浜に宿舎を持たなければいけない、全部バスで行かなければならないという話ではないのです。例えばJRを使って行ってもいいし、東武日光線を使って行ってもいいわけですよ。

高秀 ヘリコプターでもいいし、船でもいいし。

森野 ああ、船がいいですね。そういうのっ

て楽しいと思いますが、いかがでしょうか。佐々木 楽しいですね。(笑)

宮本 アクセスのことが心配なのは事実ですが、今、市長のお話を聞いて発見したのは、収縮自在だということです。これが根本的にあるとアクセス問題が解決できる糸口が見つかる気がします。

それこそ、船が出ていいし、ヘリコプターが出ていいし、今まで開発というと、必ずそこに電車を通すとか、何かをつくることだ。もう壊れないものをつくるのがアクセスだという状況でしたが、状況に合わせて、こんな楽しみ方ができるんじゃないかという発想の転換ですね。

ドイツでは、最近街の中には車が入れなくて、あるところから電車で入るとか、つまり公共の交通を最大限使って、環境を保持するという方法が新しい流れですよ。

オリンピックでも、一般の観客はここまでは車でストップで、ここからは全部公共の乗り物、バスにしてください、というのが一つの次の時代の提案ですよ。そう考えていくと、新しい文化の形成としてとらえることもできるのではないのでしょうか。

森野 私は藤沢に住んでいますが、例えば横浜あるいは東京と、行ったり来たりするときも、必ず同じルートではない。鉄道でも、横浜を経由するときは根岸線で来るときもあるし、新宿へ行くときには、ロマンスカーで行くこともあれば、JRの湘南新宿ラインというのものもある。帰りはタクシード帰ってくることもある。

成熟した都市というのは、人々の移動が非

常にフレキシブルな交通の利用の仕方をするし、そういう選択できる人間、きちんと的確に選択できる人間というのが、やはりシティーパーソンの条件だと思います。

佐々木 でも、やはり今の既存の施設をなるべく使うということと、広域開催ということを聞けば、アクセスというのは、端から見ても、確かに心配なところですよ。

宮本さんがおっしゃったように、メディアとしても、アクセス面で何かあれば、書く材料になるのは当然のことだと思います。書きたい、書きたくないにかかわらず出てしましますよね。そうすると、せっかく、いいミッシオンに向かつて歩んでいるものが、何か、ささやかなことで、マイナスイメージを受ける可能性があるというリスクなプランである……(笑)という気もしますが。

高秀 選手は、原則は一万五千のいわゆるオリンピック村をつくる。全員入るのが好ましいんだけど、場合によっては一種の分村もいいですよということになっています。しかし、開会式や閉会式の問題もあります。特に役員は絶対オリンピック村ということになりますから、移動の問題が出てくる。今、我々が選手等の移動方法として考えてるのは、新幹線、自動車、ヘリコプター。ですから、オリンピック村をつくる側にはヘリポートがあるようなところを考えています。

千葉との関係は船で行き来することを考えている。距離は長くても、時間的に言えば交通混雑が避けられます。

森野 選手団も、国によってかなり違いますよね。日本もそうですが、比較的先進国の場

合は競技ごとに、かなりばらばらにあるけど、小さい国で幾つかの競技しか出ない国というのは、まとまって来ますよね。そのところは、どううまく組み合わせていくかというのは、これまでの東京オリンピックのときの選手村と違う発想なんだろうと思うんですね。国単位というものを大事にする相手国と、そうでない国というのがあるし、競技ごとによっても違うだろう。

高秀 オリンピックは一種の国際交流ですから、プレーというよりは選手自身の交流のために、できるだけ一カ所に集めるというのも必要となってくるでしょう。ただ、アトラン



高秀 秀信 横浜市長

タ大会でも、例えば日本のサッカーは一遍もオリンピック村に入っていないんですよ。遠いところでやってきましたから。

④ーオリンピックを通じた国際交流のあり方
森野 国際交流という観点ですが、広島のアジア大会では、一公民館一国運動というのをやりました。小学校区単位より少し小さい、けれども町内会よりも少し大きな単位で、例えばチュニジアを応援するとか、ボスニアを応援するとか、そういう方式を採用したんです。

福岡のユニバシアード、このときは中学校区だったと思うんですけど、学区単位で例えば福岡ドームで野球の大会をやつてると、メキシコを応援する学区の人たちがみんなメキシコの旗を持って応援したりする。

カナダを応援する学区に取材に行ったのですが、日曜日の夜、カナダの選手と町内会の人々が神社に集まって来まして、連合町内会の会長さんみたいな人が「グッドイブニング」とあいさつをする。カタカナをそのまま読んだような発音なのにもかわらず、非常に気持ちいいが伝わっている。そういう光景が印象的でした。

広島、福岡など、その都市の規模なり、特性なりに合ったノウハウがその土地なりに工夫されて、伝播されていくというのがあると思うのですが、そんなことも含めて、横浜での交流の仕方、どんな形のものかイメージできるかというのを、自由に発言していただければ。

宮本 国際交流に関しては、全く心配してい

ないのか……(笑)

横浜はいろいろな文化が入って、混ざり合ってきたという歴史があるから、楽しみにしているぐらいです。

佐々木 ほんとにそうですね。横浜には、百三十カ国以上の方がお住まいだというから、その方々が自然に自分の国をやはり応援するだろうし。確かに子供たちの意識など、いろいろな人の意識を高めるのに、広島や福岡のシステムも悪くないけれど、決められて応援するよりも、小学生、中学生、高校生ぐらいの人たちが海外のことを勉強する機会になるというと思います。

「君の学校はキューバだよ」と言われて、何か敵の国は悪い国のようなイメージが、子供に生まれると困るなど。「クソッ、負けた」なんて。(笑)

ジャーナリズムとか報道という観点から見ると、北朝鮮と韓国の接点をつくるのは難しいけれど、一緒に野球をやるよという話になれば、アメリカと一緒に野球やったりして、スपोर्टつて本当にブレイクスルーをつくるきっかけですね。

だから、子供たちがどこかの国を応援するというのも、もちろんあってもいいし、隣に住んでるキューバの人がキューバを応援してたから、僕も、というのでもいい。でも、オリンピックに触れることが、教育に反映できるといいなあと、子供のいる母親としては思っているんです。

高秀 広島のような方式で、応援するというのも、一応は検討しています。積極的にホームステイに協力して欲しいと、市民に呼びか

けています。選手はもちろん応援の人も含めて、できるだけ大勢の人を横浜の家庭に受け入れて欲しい。一日でもいいからと。

森野 ホームステイはいいですね。お互いに顔の見える距離で接することができますから。市民の取り組みといえば、福岡の例ですと、通訳ボランティアに三千七百人ぐらい登録し、延約二万四千人が活動した。多分、横浜五輪の頃には佐々木さんの娘さんも通訳のボランティアをやっているでしょう。

佐々木 今二歳ですよ。(笑)

森野 二〇〇八年だから中学生でしょう。通訳ができる年齢ですよ。

佐々木 なるほど。

森野 そう考えていくと、今までと全然違った形の融合というのが見られるかもしれない。ひいきの国が、家族の中でも分かれていて、おやじはあの国をどうもひいきしてるようだけど、おれは違うとかそんな形で……現在、応援する野球のチームや相撲取りが、家の中で異なるのと同じように、応援する国が違って、しかも落ちこぼれなくすべての国をそれぞれ応援する、そういう形がイメージできますね。約十年後、二〇〇八年の状況というのは、そのぐらいのところまで進んでいるのかもしれないですね。

高秀 もう一つ、今、積極的に取り組んでいるのは「国際理解教育」です。中学校に外国人の英語の先生を全校に一人ずつ配置しています。文部省の予算では、三校に一人の先生なんです、市の予算を足して、一昨年から実施しています

宮本 言葉の話でいえば、英語に限りません

よね。最近、広東語や北京語を習う若い人が非常に多いんですよ。時代がアジアに変わって、次の世紀も変わっていくとなると、中華街とともに生きてきた横浜だから、アジアの受け入れ態勢という面では、オリジナルな展開をしていくような気がします。

森野 僕は、鎌倉・藤沢で生まれ育ったのですが、長谷の大仏はそれこそアメリカだけじゃなくて、世界各国の人が訪れる。そういうのを見慣れてずつと育ってきたから、今いろいろなところで国際化というけど、ことさら何だろうという部分もないことはないんですよ。横浜もまさしく同じような土地柄で、オリンピックを契機に国際化ということではないでしょう。その先にある、国境を超えるというスポーツそれ自体の持つ特質とその後にあるフュージョン的な状況が何なのか、そのあたりの展開がおもしろいのではないかと感じます。

宮本 そうですね。横浜での交流は、国際化を超えたところから始まるのかもしれない。

4 世界と日本の関係と二〇〇八年オリンピック

森野 もう一つ、議論しておきたいのは、世界の中で置かれている今日の日本の状況と、二〇〇八年に日本が置かれている状況というのは大きく異なるという点です。行政の研究誌だから、あえて言いますが、私は、長野五輪というのは日本が非常に国際的に孤立した状態の中で開かれるオリンピックだろうと思うんですね。

そうした世界との関係という問題をクリアして、日本という単位、あるいは横浜広域都市圏という単位で、世界との結びつきの中で、ある一定の位置が固まってくるタイミングが二〇〇八年だろうと、この先の十一・十二年の動きを見るんですけど、少し考え過ぎですかね。

高秀 いや、やはり、世界の人々が日本を見つめる目というのが、変わってほしいと思います。

世界の人々は、ある意味で日本は特殊な国だと、次第にそういう目で見られるようになってきたのではないかと思います。そうではなくて、普通の国ですよという視点で、見つめ直してほしいと思います。

そのためには、世界からたくさんの人々が訪れるし、こちらからも行く。人の交流で、日本という国をもっと知ってもらおう。日本の文化がどんなものなのか、経済情勢がどうなのか、あらゆる要素を全部含めて、日本も変わりますが、世界の方にも日本という国をもっと一回見詰め直していただきたいと思っています。

森野 それがこのプロセスということですかね。

高秀 ええ、そう思います。

宮本 今、日本全体が自信がない。大変なコンプレックスに陥っているという時期だと思っただけです。今まではずつと開発してきたやり方がよくなったのか、つまり今までは正しかったのか、本当にそうだったのかという、全てが覆される発想になつてくる時ですから、大変自信がない。

しかし、自信がないのは見方を変えれば、

次にどう展開していくかということ。そのコンプレックスというのをたどれば、西洋文化に対するコンプレックスかもしれないが、これからは、新しい発想とか、自分たちがこういう考え方を持ってるというのを提示しなくてはならない。黙っていても、世界の国はわからないんですね、日本のことが。

日本は、NOも言えなくなってしまうってどういうか、我々はこのいう考え方をします、という意志表示ができていない。だから、対等に、平等に会話をする関係にはなれなかったんだと思うんです。

一方、こちら側は、島国で、必死に頑張ってきて、こんなに頑張ってきたのに認めてくれないなんていいたいところで、コンプレックスに勝手に落ち込んでいっているような気がするんです。

そうなると、次の時代というのがやはり、我々ならでの発想、アジアという単位なのか日本なのかわかりませんが、こんなふうな次の時代を展望することが、世界を救うんじゃないかと思うんです。やっぱりそういう何らかの主張がもう必要なんです。

だから、今回のオリンピック立候補は、新しい時代への主張であり、提案だとアピールしなければならぬ。横浜ならでは、今まで考えなかったような発想がそこにしっかりと組み込まれてないと、興味を示されない。

今までオリンピックというの、その地域の民族性、見方を変えれば民族博覧会みたいなところがあって、それもおもしろいでしょうけれども、そうではなくて、次は新しいこういう時代になるんだと、だからこういうも

のは大切だという一つの提案を世界と対等に言い合える立場になるというのが、文化においてもそうでしょうし、もちろんスポーツにおいてもそうですし、それがとても大切な時代、大切な時期に二〇〇八年のオリンピックが開かれると思います。

佐々木 まさにその通りですよ。今までオリンピックというのが、宮本さんがおっしゃったように、こういう都市なんだよということをおアピールするために使われてきた。非常に表面的な観光に結びつけるような、ビジネスレベルだと思えます。これもあります、海があつてこういう街です、という次元で、どこも競つたと思うんですよ。

今回の横浜の提案は、そこから一段階も二段階も三段階も深く、構造やシステム、考え方という、方法論を提案してるところが魅力的なのだと思えます。横浜に港もあります、百三十万の国の人々が住んでますというところで終わってないわけですよ。先ほどの移動の考え方、ライフスタイルの考え方、人々との融合の考え方、複合的・多面的に見られたシステムを提案してるところが画期的だと思えます。

時代の流れからすると、やはりそれが必要なはずですし、皆さんどの国もそれなりの理由があつて立候補されるわけでしょう。その中で深さと重みと、形のあるシステム、構造として、あるいは考え方として提案するというのは、オリンピック委員会側にとっても魅力的だろうし、もちろん都市に住む人々にも魅力的だろうし、日本が世界に対

してどうかという点から見ても、こんなにいいチャンスはないですよ。今まで何も考えてないように思われてきた日本が、何だ、なかなかちゃんとしたことを考えてるではないかと。そしてスポーツという、多くの人が入りやすい入口を使つて、それが実現できるとすれば。

森野 ここで、新たな提案をする横浜市にあえて苦言を呈しておきたい。(笑)

JOCなり体協に古い体質が残っていると いわれますが、さらにまた、横浜市役所の職員が役人意識が抜けないまま、オリンピックに向かつていっても、なかなか難しいだろう。やっぱり横浜市自身が変わっていかなければいけない。私は、そう思うんです。

高秀 今回のオリンピックは、ある意味で世界に向けてのプレゼンテーション、情報発信の一つの形だと考えています。

それを、横浜市の職員が関係方面ともよく打ち合わせし、宮本さんに入っていたいてる部会のご意見もいただきながら、手作りで進めていこうとしている。いわゆる専門の方々に頼むと、従来の延長線上の計画ができますので、発想の転換的な意味でも、意図している形になっていかない。そのためには発想する市の職員自体が変わらなければだめです。そういうことも含めて、我々の考え方を出しませうというのが、今度のオリンピックでもあるんですね。

5 一横浜のメッセージの伝え方

佐々木 今、市長が情報発信とおっしゃった

んですけれども、多分、情報発信という言葉以上に強い意思があると思うんですね。今回の計画は、意思の表示であり、新しい生き方の提案を具体的にしている、ものすごくパワフルなメッセージが込められていると思うんです。ですから、箇条書きにしようとして、それこそ文字面になって：横浜はこう言ってます、既存の施設を使うそうです。地域と交流するそうです。これだけだと、市長がおっしゃろうとしていることのパワーがみえてこないかなあと思います。

市民がどう関わるかということもそうですし、パラリンピックとオリンピックの共存もそうだし、インフラとイベントの関係というのもそうかもしれない、いろいろな意味での、意志の強さが見られる魅力的な部分を、もっとうまくPRしたほうがいいのではないのでしょうか。

森野 今、佐々木さんがおっしゃったことは重要なことです。市長の意図するところが、私とか佐々木さんのように、土地っ子は：皮膚感覚でわかるんですよ、全体像が。問題は、それをどういうふうにするか：そうでない新しい人たちに、皮膚感覚として伝えていくかということだろうと思うんですね。

宮本 伝えていくということだと、今、きょうのこの対話はとてもよかったです。市長に悪いのですが、（横浜オリンピックの意味が）初めてよくわかったというところですね。……（笑）

僕は、オリンピックの会議に出席させていただいてはいますが、正直言うともう一つ、横浜開催の意味が、わからないところがある

たんです。

そこで、いろいろな感覚を持った横浜市民にどう伝えていくか。とっても繊細なことだと思っんです。一歩間違えると、オリンピックを開催して金使っちゃった、ああだこうだつて、あとでもう大変なことになってしまふ。市民の方が、「あ、それはいい」と思えるように、やっぱり市民から熱くなれるオリンピックをしないと。この考え方ももっと人に伝えるべきですね。その伝え方が大切だなというふうに思います。

佐々木 そうそう、ほんとにそうですよね。私、今の横浜市民も、それから多分日本国民もこういうものに飢えていると思うんです。ちよつと変な言い方かもしれませんが、神戸の大地震からボランティア意識が注目されて、今回の重油のときにたくさんの方がかけつけて、そうやって、そういう危機感を持つてものを見てみると、意識ある市民、特に横浜市民は私はひいき目でなくて、成熟した市民だと思っんです。今のようなコンセプトの繊細さ、本当に伝えなくてはならない繊細さを肌で感じられる人が、実はいろいろなところに散らばっているはずなんです。

ですから、その人たちに伝わるだけのメディア活動やPRをすれば、もしかしたら、誤解したり、よくわからない人がいたとしても、ピタッとくる人もかなり多く存在して、サポートされてくるのではないかと思っんです。

私のように横浜が好きで、横浜生まれでと言っつても、きょう、ここでお話を聞いてよくわかって興奮し始めたわけです。つまり、私にすら、今日まで、よく伝わってなかった

ということになると、一般の人には、まだ今の時点ではほとんど伝わっていないということですよ。新聞や雑誌、テレビなど、いろんな角度からアプローチして、そのときに「横浜が手を挙げたよ」だけという書き方ではないような、伝え方を工夫して欲しい。

森野 具体的には、どう伝えていけば、効果的なんでしょう。視点あるいはコンセプトとして。

佐々木 ここで、時代性という表現をしてみようと、伝えたいことと、伝えることがずれてしまうような気がします。今の時代だからこうしましょうというような単純な表現にはしたくない。

私は、言葉の仕事をしてるものだから、非常にこだわるんですけど、例えば、これから世界と手をつなぐから、あるいは地域づくりの時代だから、周りの人たちと仲良くやりましょうみたいな形で広域が出てくると、誤解されやすいと思っんです。

生き方の主張、あるいは提案、つまり、個人がどうやって生きていくかと考えたときに、横浜オリンピックの発想が出てきているわけで、国際的にこうなろうとか、外側から要請されて出てきた発想ではないと思っんです。横浜のプランというのは、余りにもよく組み立てられ過ぎていて、下手につつくと、ばらばらと形が崩れてしまいうるくらい、繊細なものだと思っつです。内側から出てくるようなメッセージをつくっていった方がいいだろうなあと、今お聞きして思っつたのですが。

森野 「内側から出てくるメッセージ」とい

うのは、いい視点かもしれませんがね。

今の話を聞かれて市長はどう思われましたか。

高秀 市民の理解を得るためには、横浜市民だけに限らないですけれども、何かそういう言葉なりキャッチフレーズなり、もう少し考えた方がいいんじゃないかということは感じています。

単にオリンピックをやりますよ、市民も一

緒にどうぞだけではなくて。ある意味では理屈っぽさがわかる横浜の市民性を考えると、時間はかかると思うんですけども、理解しやすい、理解した上で盛り上がっていく。そういう方向で市民ともっと語り合っていきたいと思っています。

森野 皮膚感覚でわかって、頭で納得しないとやっぱり納得しきれないというのがあるのですよね。

高秀 そこがやはり、横浜の特質といえると思います。

森野 「市民一人ひとりの日常生活の延長線にあるオリンピック」、きょうのみなさんのお話を一言で集約すると、そんな感じがします。

そういう流れをいかに育んでいくかということが、今後の重要な課題でしょう。